

和歌山が生んだ知の巨人・南方熊楠にまつわる人物譚

日本ペンクラブ会員リレー執筆 第三回

## 知の巨人のルーツを求めて エッセイスト 南美希子

日本を代表する「知の巨人」は？」と訊ねられれば、私は迷うことなく、南方熊楠の名を挙げるだろう。動植物、天文、歴史をはじめ数多の学問に精通し、歩く百科辞典と呼ばれた熊楠。十九カ国語を操り、洋行が珍しい明治時代に米英に留学し、各国の書物を読破したという。東洋と西洋思想の統合、迷信や心霊現象といった森羅万象に及ぶ研究、のみならず彼の知の探求は、宇宙の真理にまで迫っていた。

怪人級ともいえる彼の知の源泉はどこにあるのだろう。十歳の時から「和漢三才図会」という江戸時代の百科全書を写筆したと言われているが、それは特別に施された英才教育の一環だったのか？伝記を読むだけでは飽き足らず、丁度十歳になったばかりの我が息子の手を引いて導かれるように南紀白浜にある熊楠記念館を訪れたのは三年前の十二月のことである。この建物は、田辺湾を臨む番所山の頂上にある。冴え渡った冬の青空と眼前に広がる紺碧の海のコントラストが美しい。両わきに亜熱帯植物が生い茂る

坂道の手前にある臨海浦で海草採集をして

いる人の姿がたまに目に入った。漁を生業とする人の服装には見えない。真冬の海で一体何故かとタクシーの運転手さんに訊ねると、記念館に隣接する京都大学大学院臨海実験所の人の研究採集ではないかという。そう言えば、英国留学から帰国した熊楠は和歌浦で寒中丸裸で海に入ったりに船に乗ったりして懸命に藻類を採集したという。ふと、二重映しを見る思いがした。

記念館に展示された熊楠ゆかりの品々の中で圧巻なのは、やはり十歳から十五歳にかけて写しとったという「和漢三才図会」の筆写本の一部である。文字から挿絵に至るまで整然とした筆致で丁寧な写しとられ、その精緻さは思わず息をのむほどだ。神童という言葉ではなくくりきれない彼の頭脳に興味は募るばかりだ。余談だが、飯倉照平著の「南方熊楠」によると、彼の死後大阪大学の博士や学生らによって、遺言どおり脳の解剖が行われたという。重さは「四一五グラムで成人の平均値よりやや重いものの、脳溝が

大変深くできていたそうだ。

さて、「和漢三才図会」に話を戻そう。江戸中期、京都の漢方医寺島良安により編纂された図入りの百科全書で、東洋の百科事典の起源ともいわれる中国の「三才図会」を範とした書である。天、地、人と世界を構成する諸要素を網羅しているが、空想上のものや荒唐無稽のものも多く、それが熊楠少年の知的好奇心を層刺激したことは想像に難くない。前出の飯倉氏によると、「少年期の熊楠は『和漢三才図会』という窓を通して世界を見ていた」とあるし、松居龍五氏は、「十代の前半でたまたまこの図入りの百科全書に出会ったのは、(中略)幸運かつ決定的なことではなかったのか」と書いている。小学校入学の頃、父に初めて「訓蒙図彙」という動植物の絵の入った百科事典を買ってもらい、昼夜繰り返し返しながら十冊の本を頭に叩き込んだという素地や漢学塾通いはあるにせよ、「和漢三才図会」への執着は偏に自発的なものらしい。

一方、てんぎゃん(天狗)というあだ名が



協力 日本ペンクラブ  
人物写真 南方熊楠顕彰館

「和漢三才図会」の筆写・財団法人南方熊楠記念館

つく程、昆虫や植物を集めるために和歌山の山中で過ごしたという少年時代の逸話もあるし、帰国後熊野や那智の森に分け入り、採集のため夢中で歩きまわっているうち日が落ち八時近くに下山することもしばしばだったというエピソードからしても、和歌山の自然環境がこの奇才の開花に大きく寄与したことは紛れもない事実だろう。

翻って、現代の子供たちに目を転じてみればどうだろう。外遊びの著しい減少、乳幼児期からの電子機器との過度な親和のみならず、ページを綴ることで知的好奇心を増幅すべく百科事典はもはやウェブ版として必要項目の検索時のみに頼る存在である。熊楠級の知の巨人の再来を現代に求めるとするならば、心が曇る今日この頃なのである。



南美希子(みなみ・みきこ)

エッセイスト、キャスター。1956年東京生まれ。父親は和歌山県出身。聖心女子大学3年生の時、テレビ朝日のアナウンサー試験に合格し、3年終了後同局に入局。86年に独立。以後、テレビ、雑誌、講演などで幅広く活躍。著書に「男の勘違い」、「恋をつかみ、仕事で輝く」、「40歳からの子育て」、「オバサンになりたいくない」など多数。